

一粒の塩の叙事詩

第一章：海の子として

太古の昔、私は海の懷に生まれた。
ナトリウムと塩素の永遠の契りを結び、
青い母なる海の中で、無数の兄弟姉妹と共に踊った。

潮流に身を任せ、深海から浅瀬へと旅をした。
サンゴ礁の間を縫い、魚たちの銀鱗と戯れ、
月の引力に導かれて、満ち潮と共に岸边に近づいた。

海藻に絡まり、波頭に躍り、
私は海そのものの味を宿していた。
塩辛い記憶を結晶に刻み込みながら。

第二章：天への昇華

やがて太陽の慈愛深い光が私を呼んだ。
蒸発という名の魔法によって、
私は水分子と別れ、軽やかに空へと舞い上がった。

風に乗り、雲の合唱団に加わった。
水蒸気の衣をまとい、空中を漂いながら、
大地を見下ろす旅人となった。

雷鳴と共に踊り、稲妻の光を浴びて、
私は雲の中で再び水と出会った。
新たな仲間たちと手を取り合い、雨粒へと変身した。

第三章：大地への帰還

重力の呼び声に応じて、私は降下を始めた。
雨として大地に降り注ぎ、
土の芳香と混じり合った。

川となり、谷を下り、
植物の根に吸い込まれ、
動物たちの渴きを癒した。

やがて地下深くへと浸透し、
岩盤の隙間に潜り込んだ。
そこで私は静寂の中で、長い眠りについた。

第四章：石の夢

何万年もの間、私は岩塩として眠り続けた。
地殻変動の振動を感じながら、
圧縮されて純白の結晶となった。

恐竜の足音を聞き、
氷河期の寒さを体験し、
大陸の移動を肌で感じた。

私は地球の歴史の証人となり、
時の流れを結晶格子に刻み込んだ。
古代の海の記憶を胸に秘めながら。

第五章：再び光の下へ

人間の手によって、私は再び光の下に現れた。
採掘機械の轟音と共に、
長い眠りから目覚めた。

精製され、磨かれ、
純白の姿を取り戻した私は、
新たな使命を与えられた。

包装され、運ばれ、
店舗の棚に並んだ。
多くの人々の手に取られるのを待ちながら。

第六章：食卓という舞台

ついに私は人間の食卓に上った。
料理人の手によって振りかけられ、
食材たちの味を引き立てる魔法をかけた。

スープに溶け込み、
パンに結晶として輝き、
野菜の甘みを際立たせた。

私は味覚の指揮者となり、
人々の舌の上で交響曲を奏でた。
美味しいという喜びの瞬間を創造した。

終章：永遠の循環

やがて私は人間の体を巡り、
再び海へと帰っていく。
これは終わりではなく、新たな始まりだ。

私の物語は循環する。
海から生まれ、空を旅し、
大地に眠り、再び人々の元へ。

一粒の塩として、私は永遠に旅を続ける。
生命の味を運ぶ使者として、
愛と記憶を結晶に込めながら。

これが私の叙事詩。
小さな塩粒の、壮大な人生の物語。
海の子は、永遠に歌い続ける。